

や 田 大 塚 古 墳
矢 田 大 塚 古 墳

1984. 3

真備町教育委員会

序

岡山県南西部に位置する真備町は、“吉備真備公”の誕生の地であり、豊かな自然に恵まれ、タケノコ、ぶどうの産地として有名な所であります。人口も町規模としては県下最高の22,000余名を数え活気あふれる町となっております。

ここに紹介する箭田大塚古墳は、県下三大巨石墳の一つであり、昭和4年に国指定史跡に指定されています。墳形は、かつて円墳とされていましたが、戦後になって前方部を東側に備えた前方後円墳説やホタテ貝式古墳説がたかまり論議されてきました。

また、史跡地に接する竹藪は、タケノコ栽培地として利用しているため、現墳端部に影響を及ぼすこともあり、国の補助を受け、県教育庁文化課の指導を仰ぎ、原墳形を明らかにすべく確認調査を実施することになりました。

確認調査の結果、箭田大塚古墳は、県内では最大級の巨大円墳であることが極めて強くなりました。

本書はこうした調査の成果をまとめたものであります。今後の文化財の保護、保存に活用され、また考古学研究の資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、本調査にあたり文化庁、県教育庁文化課、真備町文化財保護委員等関係各位から終始献身的なご協力と助言を賜りました。また猛暑にもかかわらず地元の方々には確認作業に従事していただきました。あわせて厚く御礼申し上げます。

昭和59年3月

真備町教育委員会

教育長 林

寛 二

例 言

1. 本報告書は、真備町教育委員会が昭和58年度国庫補助を受けて実施した箭田大塚古墳の発掘調査の概要報告書である。
2. 箭田大塚古墳は、岡山県吉備郡真備町箭田に所在する。
3. 発掘調査は、岡山県教育委員会の協力を得て、岡山県教育庁文化課職員中野雅美が担当し、専門委員の指導、助言を受けて昭和58年8月18日～10月20日まで実施した。
4. 発掘調査に際しては、岡山県教育委員会、真備町文化財保護委員、地権者等関係各位から多大な協力を頂き、厚く謝意を表します。また、現地では、県内研究者各位に指導、助言を受けたことを記し、深謝を表します。
5. 出土遺物の整理、実測及び本報告書の執筆、編集は、岡山県教育庁文化課分室で中野が行った。
6. 報告書作成にあたっては、岡山県立博物館高橋護氏、岡山県史編纂室葛原克人氏、伊藤晃氏、さらに岡山県教育庁文化課職員の助言を得た。
7. 本報告書に使用した吉備寺蔵の箭田大塚古墳出土遺物の写真掲載については、吉備寺の協力を得た。さらに岡山県公聴広報課より一部写真の提供を受けた。
8. 本報告書に用いている高度値は、標準海拔高度である。また、方位は磁北である。
9. 本報告書第 Ⅱ 図に使用した地形図は、建設者、国土地理院発行の25,000分の1地形図（玉島）を複製したものである。

目 次

序

例 言

本文目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の契機と経過	5
第3章 発掘調査の概要	11
第1節 遺跡の位置と現状	11
第2節 調査の方法と概要	11
第3節 出土遺物	20
(1) 須恵器	20
(2) 埴輪	24
(3) 鉄器	28
第4章 まとめ	32

図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 箭田大塚古墳と周辺遺跡分布図	3
第3図 箭田大塚古墳周辺地形図	4
第4図 箭田大塚古墳古図	9
第5図 墳丘、周辺地形測量図及びトレンチ位置図 (1/900)	10
第6図 T-1, 2, 3平・断面図 (1/100)	13
第7図 T-4, 5, 6, 7平・断面図 (1/100)	15
第8図 T-8平・断面図 (1/100)	16
第9図 T-9平・断面図及び拡大図 (1/100, 1/40)	17
第10図 T-10, 11, 平・断面図 (1/100) 及びT-12断面図 (1/100)	19
第11図 T-2出土須恵器実測図 (1) (1/4)	22
第12図 T-2出土須恵器実測図 (2) (1/4)	23

第13図	T-2 出土形象埴輪実測図(1) (1/4)	25
第14図	T-2 出土形象埴輪実測図(2) (1/4)	26
第15図	各トレンチ出土円筒埴輪実測図(1/4)	27
第16図	T-2 出土鉄鏡実測図(1) (1/4)	29
第17図	T-2 出土鉄鏡実測図(2) (1/4)	30
第18図	墳丘測量図(1/600)	33

表 目 次

第1表	鉄釘計測値表	28
第2表	鉄鏡計測値表	31

図 版 目 次

図版1	航空写真	8-2	T-9 墳丘盛土堆積状況 (南東から)
2-1	航空写真	-3	T-10 周溝検出状況(西から)
-2	箭田大塚古墳全景(南から)	9-1	T-11 周溝検出状況(東南から)
3-1	墳丘及び石室入口	-2	T-11 周溝検出状況(東から)
-2	石室内部(南から)	10-T-2	出土須恵器(1)
4-1	T-1 周溝検出状況(北東から)	11-T-2	出土須恵器(2)
-2	T-2 周溝検出状況(北東から)	12-T-2	出土形象埴輪(1)
-3	T-2 遺物出土状況(西から)	13-T-2	出土形象埴輪(2)
5-1	T-3 周溝検出状況(北東から)	14-T-2	出土形象埴輪(3)
-2	T-4 周溝検出状況(北から)	15-1	T-2 出土鉄鏡
-3	T-5 周溝検出状況(南から)	-2	T-2 出土鉄鏡
6-1	T-6 周溝堆積状況(北東から)	-3	T-2 出土鉄釘
-2	T-6 溝検出状況(西から)	16-1	吉備寺藏 箭田大塚古墳出土遺物一部
-3	T-7 検出状況(北から)	-2	現地説明会
7-1	T-11 周溝検出状況(北東から)		
-2	T-11 周溝堆積状況(東から)		
8-1	T-9 墳丘及び周溝検出状況 (北東から)		

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

箭田大塚古墳は岡山県の南西部、吉備郡真備町大字箭田字矢砂に所在する。古墳の所在する真備町は、高梁川の西の小田川下流に位置し、東は高梁川を境に清音村、北東から北は総社市、西は矢掛町、南は倉敷市、船穂町と接している。

町の中南部を東西に流走する小田川は、その両岸に沖積地を形成し、特に高梁川に注ぐ地域には広大な沖積地が広がっている。小田川にも数多くの支流が流れ込み、その西岸にも狭いながらも沖積地を形成している。町の中央部にあたる箭田にもほぼ南北に平地が形成されている。かかる平地をとりまく丘陵はほとんどが低丘陵で、標高200m以下のものである。特に箭田には標高100m以下の低丘陵が広がり、町の特産である箭の栽培が盛んに行われている。この広大な竹林のため、丘陵は表面が削られて下方へ覆せられたため、斜面は階段状を呈するところが多く認められ、地形が改変されている。さて、古墳の位置する箭田の平地は南北に細長く、箭田大塚古墳は、箭田に南北に細長く形成された平地の北方の沖積地を広く望める丘陵先端部に位置している。



第1図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

高梁川下流域の西に位置し、小田川によって形成された肥沃な沖積平野の地を占める真備町一帯は、原始、古代を通じて遺跡が数多く認められる地域である。この地域が、原始、古代に吉備地方にあって中心的位置の一面を成していたことは言うまでもなく、それは比較的早く安定した平地に恵まれ、交通上の要地でもある地勢の地であったことに起因するであろう。

先土器時代、縄文時代の遺跡は、まだ町内では明らかではないが、弥生時代にはいと山裾や丘陵上に集落址が点在することがわかっている。(註1) 今後更に多くの集落址が発見されると思われる。小田川を少しさかのぼった真備町兵妹からは流水文銅鐻が出土している。また立坂遺跡(註2)、西山遺跡(註3)、黒宮大塚(註4)など、弥生時代後半～終末期、更には古

墳時代に続く墳墓や前期古墳などが低丘陵上に数多く存在し、吉備地方を特徴づける特殊に飾られた器台や壺を伴っている例が多い。真備町には多くの古墳が分布するが、その分布を見るとき、大きく三地域に分布することが出来る。まず小田川下流の南側、高梁川との合流地点に近い南山地区から下二万地区にかけての地域、町の北東部の末政川流域及びその東の新保川までの地域、更に小田川北岸、箭田大塚古墳の所在する箭田を中心に、その西部の尾崎地区、妹地区に到る地域である。これら三地域は、古墳の分布は一樣ではなく、それぞれの歴史的性質を持ち得ている。これらの地域には、その地域を越えた結合体を想定しなければ理解し難い有数な古墳も存在する(註5)。これらの古墳は、南山地区の丘陵上に全長約45mの前方後円墳の天狗山古墳、末政川西側の方墳で竪穴式石室を持ち、多く鉄器を出土した竜王山古墳などがある。この天狗山古墳、竜王山古墳は、いずれも5世紀代に築造されたものとされている。後期古墳には、二万地区の山裾に築造されている全長約45mの二万大塚古墳がある。主体部に横穴式石室をもち、その規模は玄室長約5m、玄室幅約2mを測るとされている(註6)。この二万大塚古墳は、箭田大塚古墳より先行すると考えられている。箭田を中心とする地域には、古墳時代前中期にその地域にあって傑出した古墳はいまのところ認められていない。後期にはいるとこの箭田の地に忽然と箭田大塚古墳が築造される。この地域には、古墳時代前期より後期に至るまで営々と小規模な古墳の築造を続けてきた地域であって、巨石墳が出現してくる大きな政治的動向を示唆している。箭田大塚古墳の背後の丘陵及び、丘陵斜面には、従うかのように横穴式石室を主体部とする小円墳の郡集墳が多数存在する。

奈良時代には、箭田大塚古墳の南の山裾に吉備寺址、岡田地区の岡田廃寺、さらに小田川南岸の服部地区に八高廃寺の仏教寺院が建立されている。二万大塚古墳、箭田大塚古墳に引き続きこの地に勢力を誇示した地方豪族層の存在が想起されてきたこの地は、古代国家が整備されていく中で重要な役割りを果たした吉備真備など下道氏の本貫地でもあり、下道氏との深いかかわりの中で意味づけられよう。

註1 間壁忠彦・間壁茂子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚」『倉敷考古館研究集報』第13号、1977

正岡睦夫・山磨康平・平井勝「西山遺跡」1979、真備町教育委員会

註2 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻3号、1967

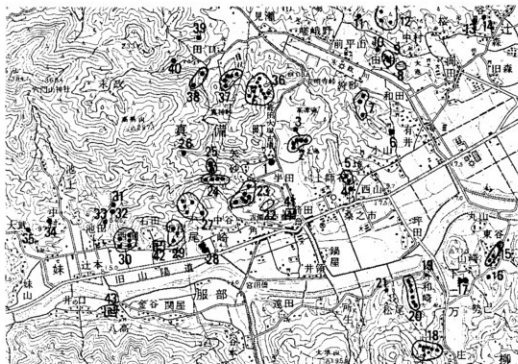
註3 註1と同じ

註4 註1と同じ

註5 平井勝「高津池北古墳」1982、岡山県真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会。

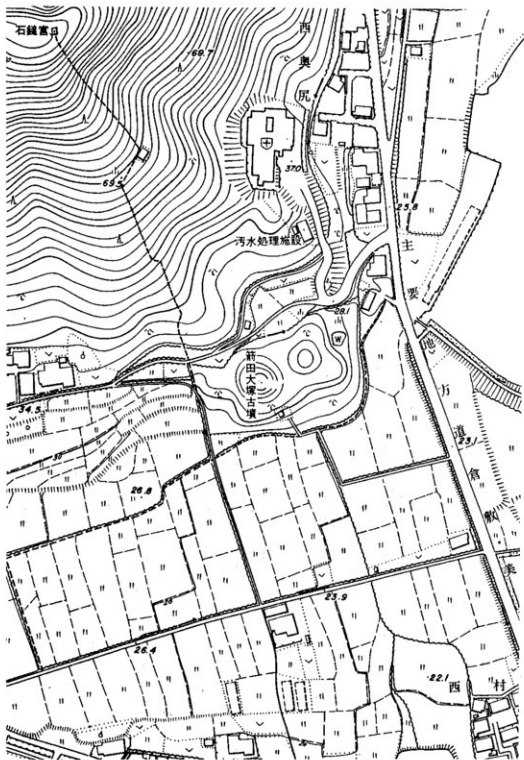
この報告書内の「歴史的景観」の一部を著者の好意により再録した。

註6 「真備町史」真備町、1979



- | | | | |
|--------------|-----------|------------|-------------|
| 1. 箭田大塚古墳 | 2. 皿池古墳群 | 3. 高津池北古墳 | 4. 剣塚古墳 |
| 5. 西山古墳群 | 6. 亀王塚古墳 | 7. 有井古墳群 | 8. 宮造田遺跡 |
| 9. 田中古墳群 | 10. 田中塚古墳 | 11. 寺在古墳 | 12. 山之谷古墳群 |
| 13. 東園神社境内古墳 | 14. 稲荷塚古墳 | 15. 東谷古墳 | 16. 勝屋坂古墳 |
| 17. 二万大塚 | 18. 菅原古墳群 | 19. 外和崎古墳 | 20. 大谷大塚古墳群 |
| 21. 松尾古墳 | 22. 半田遺跡 | 23. 土地衛古墳群 | 24. 向坂古墳群 |
| 25. 矢砂大池古墳群 | 26. 高馬古墳 | 27. 瀬戸古墳群 | 28. 藤宮大塚 |
| 29. 坂根古墳群 | 30. 西開古墳群 | 31. 内山池東古墳 | 32. 古墳 |
| 33. 古墳 | 34. 古墳 | 35. 油田古墳 | 36. 高津池古墳群 |
| 37. 古墳群 | 38. 真神古墳群 | 39. 下田口古墳 | 40. 鎮守様の塚 |
| 41. 吉備寺址 | 42. 高德寺址 | 43. 八高庵寺 | |

第2図 箭田大塚古墳と周辺遺跡分布図



第3圖 周辺地形圖

第2章 調査の契機と経過

真備町では、町の主産業として筍の栽培がさかんに行われている。古墳の所在する丘陵先端部も竹林に広く覆われている。古墳は、昭和4年に国の史跡に指定を受け、保存処置が講じられた。しかし、周囲の竹林は、毎年盛土を必要とするため掘削、削平を繰り返され、旧地形の変容は著しく、指定地内にも進行している。また、近年墳丘の東側の高まったところを前方部とみなし、約80mの前方後円墳とする意見もある。そのため早急に、古墳の規模、形態などを明らかにして古墳の保護、保存及び整備の対策を講ずる基礎資料を得るため、昭和58年度国庫補助を受けて発掘調査を実施することになった。

調査は、まず墳丘の下草刈りから行い、墳丘の残存状態を掌握したのち、トレンチを設定し、掘り下げた。その結果、墳丘の東～東南のトレンチで周溝を確認し、周溝の続きを南から西側へと追求していった。周溝は、墳丘をめぐるように検出され、石室の奥壁を中心に半径約25mの線上に位置することが明らかになった。このため、当初予定していた墳丘東側の「前方部」への調査は変更して、周溝、外部施設などの追求に努めた。発掘調査の終了後、古墳及び周辺の地形測量を実施した。

発掘調査は、専門委員の指導、助言を得て、昭和58年8月18日～10月20日まで行った。調査にあたっては、岡山県教育委員会、真備町文化財保護委員会をはじめ地権者等関係各位には多大なご協力を得た。また、発掘作業にあたっては地元住民、草原孝典（奈良大学学生）の協力を得た。

調査体制

専門委員

- 鎌木義昌 岡山理科大学教授・岡山県文化財保護審議会委員
近藤義郎 岡山大学教授・岡山県文化財保護審議会委員
水内昌康 岡山女子専門看護学校教頭・岡山県文化財保護審議会委員

岡山県教育庁文化課

- 河本 清 課長補佐・埋蔵文化財係長事務取扱 中野雅美 文化財保護主事

真備町教育委員会

- | | |
|--------------------|-------------|
| 服部 毅 前教育長 | 片岡展弘 社会教育主事 |
| 林 寛二 現教育長 | 浅野仁子 主事 |
| 松田俊和 社会教育課長 | 鳥羽 毅 公民館職員 |
| 岡本 久 社会教育係長・社会教育主事 | 岡本和子 公民館職員 |

日誌抄

昭和58年

- 8月18日(木) 器材搬入
- 23日(火) 墳丘下草刈り
- 24日(水) 墳丘下草刈り
- 29日(月) 発掘 調査開始。T-9 掘り下げ。
- 30日(火) T-9 掘り下げ。
- 31日(水) T-9、2 掘り下げ。
- 9月1日(木) T-2、11 掘り下げ。
- 2日(金) T-2、11、3 掘り下げ。
- 3日(土) T-3 掘り下げ。T-2、11 清掃、写真。
- 5日(月) T-3、4、10 掘り下げ。
- 6日(火) T-4、5 掘り下げ。
- 7日(水) T-4、5、6 掘り下げ。
- 8日(木) T-6、1 掘り下げ。
- 10日(土) T-6、1 掘り下げ。
- 12日(月) T-7、8、6 拡張、掘り下げ。
- 13日(火) T-8、6 拡張、掘り下げ。T-7 平面図作成。
- 14日(水) T-8 拡張、掘り下げ。トレンチ位置図作成。
- 16日(金) T-9 拡張、掘り下げ。T-1 ~ 5、9 平面図作成。
- 17日(土) T-3 ~ 5 清掃、写真。T-6 平面図作成。
- 19日(月) T-6、7 清掃、写真。T-10、11 平面図作成。
- 20日(火) 文化庁伊藤稔調査官及び専門委員の来跡を受け、指導・助言を受ける。
- 21日(水) T-1、8、10 清掃、写真。T-8 平・断面図作成。
- 22日(木) T-3 拡張、掘り下げ。T-9 拡張、清掃、写真。
- 24日(土) T-1 ~ 11 清掃。T-6 断面図作成。現地説明会。
- 26日(月) T-12 掘り下げ。T-7 断面図作成後埋め戻し。
- 29日(木) T-1、3、9、10、11 断面図作成。T-12 掘り下げ、清掃、写真、平・断面図作成後、埋め戻し、T-8 埋め戻し。
- 30日(金) T-4、5 断面図作成後、埋め戻し。T-6 埋め戻し。
- 10月1日(土) T-9、10 埋め戻し。測量の杭打ち。
- 3日(月) T-2 断面図作成。T-2 拡張、掘り下げ。T-1、3 埋め戻し。
- 5日(水) T-2 清掃、写真。T-11 埋め戻し。
- 6日(木) T-2 埋め戻し、地形測量。
- 7日(金) T-2 埋め戻し、器材整理。地形測量。
- 8日(土) 地形測量。
- 10日(月) 地形測量。
- 12日(水) 地形測量。
- 13日(木) 地形測量。
- 14日(金) 墳丘測量。
- 17日(月) 墳丘測量。
- 18日(火) 地形図補充作業。
- 20日(木) 出土遺物及び器材を岡山に運搬。

過去の調査、研究

箭田大塚古墳は、その巨大な横穴式石室をもつ巨石墳として、全国的にあまりにも有名なものである。過去、幾多の先学によって永年たびたびの調査、研究が行われ、その成果が紹介されてきた。その成果は、明治年間に始めて発掘調査されて以来数多く、箭田大塚古墳の歴史的位置づけを述べたものも多く含まれている。今回この機にあたり、先学の調査、研究等の整理する意味で、以下要約を記す。

箭田大塚古墳は、明治34年8月14日に始めて発掘調査が行われている。この発掘調査の契機については、遠山荒次「吉備郡箭田村の大塚」（註1）によると、土地の人が医学博士であった井上通泰（註2）に古墳に小さな穴が有り、発掘の事を話した。井上は、そのことを当時の岡山県知事に話し、古墳の発掘の許可を得た。その監督として、県吏員の塚本某を出張させ、村中総出で発掘が行われたと記している。

この発掘については、「備中国吉備郡笹田郡大塚記録」（註3）の中に当時の箭田大塚古墳の周辺状況、古墳の外形観察などとともに記されている。また、この中には当時東京帝国大学人類学教室に在した八木英三郎による「古墳発見品説明書」の写しが存在する。この「古墳発見品説明書」は、明治34年9月付けのもので、古墳の発掘時期とあまり隔たりがなく八木英三郎自身も古墳の発に際して深い関わりをもっていたものと思われる。

この「備中国吉備郡笹田郡大塚記録」の中には、古墳の墳丘絵図（第4図）、石室実測図（第4図）、遺物出土位置図、出土遺物の状況などが記載されている。この中から当時の本墳についての概要を抽出してみると、墳形は円塚で規模は径約26間、墳丘には4重に円筒埴輪巡らす。石室は南方向に開口し、玄室長28尺、玄室幅10尺、玄室高12尺、羨道長34尺、羨道幅7尺、羨道高7尺で石室長は62尺となり、玄室内には長方形の石柵が3基存在すると示されている。これらの記録は、現在我々が本墳に対して周知している事実とさほど差異はなく、当時の古墳調査の広範囲の視点、高い見識を察することができる。

この記録の中で、今回調査に際して最も興味を引いた事象は墳丘の絵図（第4図）で、その絵図の中には、墳丘の裾に『巾貳間位四十年前ハ溝』、さらにその外側に『三間位堤』と記されていることである。このことは、絵図が記されたと思われる明治30年代後半及び、その40年前の江戸時代末期においては、本墳の周溝の落ち込みが存在していた事実である。ことことは、調査の結果においても周溝の落ち込みが近世、近代まで存続していたことが裏付けされた。さらに、周溝外側には『堤』の存在が記されており、これは周溝の落ち込みに対しての旧地形の残存部としてのものなのか、それとも本墳の周溝外側に外提部壯の施設が存在した可能性を想起させるものである。

また、古墳の名称は「箭田大塚」ではなく「矢砂大塚」と称していて、この名称は昭和20～30年代まで用いられている。

次に注目すべきものとして、大正5年(1916)京都大学の梅原末治が「備中国箭田村大塚調査報告」(註4)と題して報告している。この報告の中では、古墳の立地条件及び古墳周辺の歴史的環境を述べ、さらにその巨大な横穴式石室を九州、近畿地方などのものと対比し本墳の時期及び石室の形態的特徴を位置づけようとした。また、出土遺物については、勾玉、丸玉等の玉類が多く存在するにもかかわらず管玉の出土がないことを指摘している。さらに、刀剣装具に優秀なのがあるのに甲冑等武具類のないことを古墳の性質上特記すべき事としている。加えて、石室内の石の接合面に石灰を混ぜた土を塗っていることを確認して、营造の術が進歩している事を上げている。

昭和期に入ると、永山卯三郎による調査(註5)が進む。永山は、現地における墳丘、石室の正確な計測、出土遺物の調査、紹介などを行っているものの、過去における八木、梅原らのような新しい問題点の提起はされていない。先に述べた遠山荒次は、「吉備郡箭田の大塚」(註6)の中で梅原と同様な疑問点を抽出している。

昭和30年代において、箭田大塚古墳の前方後円墳説(註7)が論じられるようになる。さらに昭和40年代に入ると、約80m級の前方後円墳としてはほぼ定着する。箭田大塚古墳は、古墳時代後期、6世紀代の巨大な横穴式石室を有する古墳として、備中こうもり塚古墳とともに、古代吉備における吉備政権の残影としての歴史的な位置づけがなされる。

最後に最近の書(註8)より石室の計測値を付記する。石室全長19.1m、玄室長8.4m、玄室幅3.0m、玄室高3.8m、羨道長10.7m、羨道幅2.3m、羨道高2.4m。昭和4年国史跡の指定。

註1 遠山荒次「吉備郡箭田の大塚」『吉備考古』第4号 1930

註2 1866～1941 国文学者・医師、柳田国男の兄、岡山医専教授、当時岡山において国史、国文の研究をリードし、数多くの研究会創立に参画した。

註3 発掘後さほど年月を置かずに集積されたものか。

註4 梅原末治「備中国箭田村大塚調査報告」『史林』第1巻第4号 史学研究会
1916 この中で梅原は、玄室円の埋葬施設を4個の石床としている。他の研究では全て3個の埋葬施設となっている。

註5 永山卯三郎『岡山県通史』上編1930

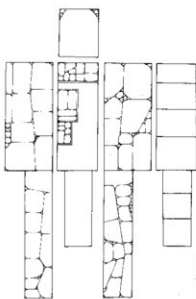
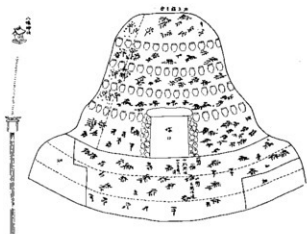
永山卯三郎『吉備郡史』上巻 岡山県吉備郡教育会1937

註6 註1と同じ

註7 西川宏「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』考古学研究会1964

註8 「岡山県の文化財」岡山県教育委員会1979

岡山吉備郡新田村吉備大塚古墳



岡山縣吉備郡新田村

小凡上大塚内部分解圖

西又東各三塊

岡山縣吉備郡新田村

吉備公孫廟層

第4圖 新田大塚古墳古圖



第5図 墳丘・周辺地形測量図・トレンチ位置図(1/500)

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の位置と現状

箭田大塚古墳は、小田川左岸に連なる山群から東南に延びる支脈が傾斜度を緩めて突き出た丘陵先端部に位置する。北側背後には、石鐘宮を祭る神奈備型の山があり、前面の東南部は小田川によって形成された肥沃な沖積平野が広がる。小田川左岸には東西に旧山陽道が通じ、また南北には高梁市～玉島を結ぶ主要道が走り交通上の要点である。古墳を築造するには、最も好位置であることは言うまでもない。

古墳が存在する丘陵先端部は、北側に小さな谷が入り、古墳背後は町道などによって丘陵が大きく切断されている。古墳は、国史跡指定を受けているもののその回りは筍の栽培のため竹藪が広がる。この筍の栽培には、毎年盛土を必要としたため周辺の地形がかなり変化しているとともに、指定地内の墳丘もかなりの掘削、削平を受けている。墳丘は3段に築造されているといわれているが、墳丘裾部は回りがすべて数10cm～2mぐらいの段になっており、特に東及び西部では下段の築成段がほとんど消滅してしまっている。

第2節 調査の方法と概要

今回の調査は、古墳の範囲確認及び周辺の地形測量を主目的としたため、古墳が位置する丘陵先端部の一帯を調査の対象とした。調査は、周溝の有無を確認するとともに、周溝の追求によって古墳の規模、形態などを明らかにした。調査は、墳丘の草刈りを行ない、墳丘の残存状態及び、周辺の地形を考慮して、トレンチを設定した。しかしトレンチ周辺は、竹林が密生しているため、限定された地点に限られた。

発掘調査は、まずT-9、11を設定し、周溝の存在を明らかにするとともに、石室正面に向かって左回りに追求していった。全体的には、当初の目的は達したが、古墳背後の地点については、調査が限定されたことなどもあって十分なものとはいえなかった。古墳に付属する外堤部などの施設の存在についても明らかでない。

検出した遺構は、性格をつかむために必要に応じて掘ったが、近接して同様の遺構を検出した時は、上面で確認するにとどめた。

以下、各トレンチの説明を行なうが、その順序はかならずしも掘った順とは一致せず、便宜的に石室正面のT-1から左回りに記述する。また、トレンチの名称についてもその順序に従っている。

T-1

このトレンチは、石室入口の前部に当たり、排水施設、墓道、周溝などの有無を確認するために設定した。石室に直交したトレンチでは、地表下約20cm前後で地山が検出できた。地山面は、それぞれ東及び西方向に若干落ちを示していた。しかし、上面に堆積する第2層は竹藪の盛土で、落ちも掘削の際のものと思われる。また、排水溝などの施設は確認できなかった。

石室に平行したトレンチでは、周溝の一部を検出した。周溝の深さは、検出面から約90cm残存していた。周溝内は、第3層～第8層堆積し、第6、7層に須恵器、埴輪が多く出土した。第3層～第5層は、堆積状況からみて後世の堆積と考えられる。出土遺物は、各層から円筒埴輪片が検出された。

T-2

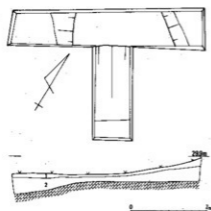
トレンチは、T-1のすぐ西側に位置し、残存している墳丘のすぐ下から放射状に幅100cm、長さ850cmを設定した。地表下約100cmは、竹藪の盛土が厚く堆積していた。このため、墳丘裾部、周溝は、かなり深くまで削平を受けていることが明らかになった。周溝は、その下の地山面に幅約400cmにわたり検出された。残存する深さは約120cmを測る。周溝内は、第5層～第9層が堆積し、特に第6層～第8層からは多種の遺物が出土した。そのためトレンチの東側に拡張区を設けたが、周辺は作業小屋や竹が密集しており限定されたものであった。この拡張区でも周溝が確認でき、T-1で検出した周溝にやや弧を描いて続く。

出土遺物は各層から出土したが、その大半が第6層～第8層から出土したもので、須恵器、形象埴輪、円筒埴輪、鉄器など多種多様にあたる。須恵器は、図示した(第11、12図)もので有蓋高杯を中心に裝飾壺、壺、器台、杯、甌などで、今まで確認されていなかった器種も明らかになった。詳細については後述するが、その大部分は今まで周知されていた須恵器よりも形式的にはやや古相のものであった。形象埴輪は、人物埴輪2体は確認できるものの、他の破片については残存状態が悪いこともあって不明なものが多いが、馬や家を想起できるものも含まれている。鉄器としては、鉄鎌が30本前後、鉄釘が7本出土した。鉄鎌は一塊になって検出された。その他には、弥生式土器、土師器(高杯)、サヌカイト片が少量出土した。

須恵器、鉄鎌、鉄釘などは、かつては石室内の玄室に納められていたものと考えられる。これらの遺物は追葬の際に片付けられ周溝に放置されたものであろうか。また、人物埴輪などの形象埴輪は、石室入口付近に立ち列んでいたものが周溝に転落したものであろう。

T-3

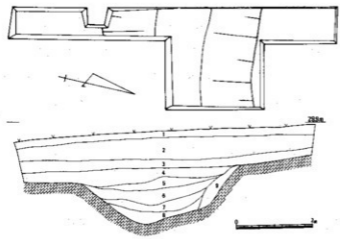
このトレンチは、墳丘の残存状態が良好な墳丘の南側に位置する。地表下約100cmは盛土でその下に地山面に堀り込まれた周溝を墳端近くで検出した。ここでは周溝は、上面でその存在を確認するに止めた。周溝は幅約450cmを測り、その外側には幅約200cmにわたり地山面が統



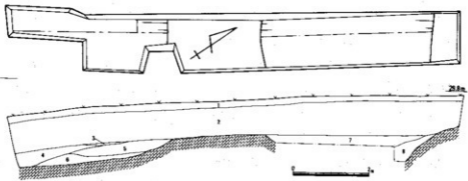
1. 表土 2. 暗灰褐色土、地山土の互層



1. 表土
2. 灰黄褐色砂土
3. 灰褐色砂土
4. 灰黄色砂土
5. 淡黄褐色砂土
6. 暗灰色砂土
7. 黄灰褐色砂土
8. 黄褐色砂土(地山土を多く含む)



1. 表土
2. 暗茶灰色土
3. 黄灰褐色土
4. 暗茶灰色土
5. 淡黄色砂質土
6. 淡黄褐色砂土
7. 暗灰色土
8. 淡黄灰褐色砂土
9. 黄褐色砂



1. 表土
2. 灰黄褐色土
3. 地山土ブロック
4. 淡黄灰色土
5. 淡黄灰色土、混合層
6. 黄灰褐色土
7. 淡黄色砂土
8. 淡黄褐色砂土
9. 黒灰色土

第6図 T-1, 2, 3平・断面図 (1/100)

き、さらに地山面を掘り込み約40cmの段を生じている。第5、6層には、須恵器、埴輪片を相当数包含していた。この幅約200cmの地山面は上面をかなり削平を受けているものの、両側から削り出したような土手状を呈している。この土手状のものは、古墳の周溝外側に存在した外堤部である可能性が考えられる。

T-4

このトレンチは、古墳が西側部に造り出しが付く可能性を指摘されていたことから、その括れ部にあたるであろう位置に設定した。その結果、周溝は第2層の削平を受けていたが検出された。周溝の方向は、やや開き気味ながらT-3検出の周溝と続くように円弧線上に乗るものである。周溝は、内側肩部が竹藪の掘削段のため確認できなかったが、幅450～500cm、深さ約100cmを測る。出土遺物は、円筒埴輪片が少量出土した。

T-5

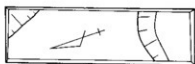
T-4の西側横に位置する。このトレンチはT-4で周溝が確認されたため、西に延びる前方後円古墳の可能性は少なくなったが、再確認のため設けた。表土直下ですぐ地山が検出され、トレンチ北東隅に周溝の外側肩部の一部を確認した。この結果、西に延びる前方後円古墳の可能性が否定的に考えざるを得ない。出土遺物は、埴輪片が数片出土したにとどまった。

T-6

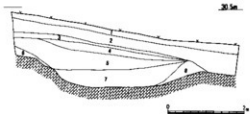
墳丘の西側の高まった位置である。竹林の密集度が高いためトレンチは2か所に分けた。東トレンチは、地表下約130cmで地山が検出でき、その上部は盛土が厚く堆積している。地山面には、南北方向に幅約80cm、深さ約20cmの溝状遺構が存在した。溝状遺構は、周溝と平行するような位置にあり、古墳に伴う可能性があるが、各トレンチからは少量ながら弥生式土器が出土しているところから、弥生時代の遺構である可能性も残されている。西トレンチでは、第1層～第4層が盛土で約70cm堆積しその下層に地山面が認められ、周溝はトレンチ東部に検出できた。周溝は、検出状況から周溝の内部肩部は掘り残した位置にあると思われる。規模は、幅約700cm、深さ約90cmを測り、T-2・3・4で検出された周溝幅より大きい点が指摘できる。また、周溝底部の高さもT-2の海拔約27.2mに比べここでは海拔約30.3mとかなり高低差が生じる。出土遺物は、第5層～第8層を中心に須恵器（杯・甕）片、円筒埴輪が出土した。

T-7

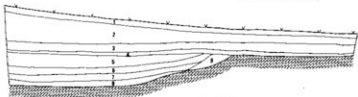
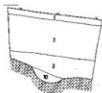
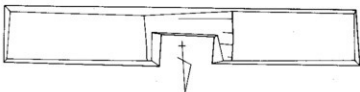
古墳の裏側は、調査対象が限られ、また竹藪が密生しているためトレンチの位置は限定されたものになった。当初から、古墳北側に存在する弧を描く溝が当時の同溝が踏襲されたものと考え、墳丘と溝の間の位置を予定していた。調査の結果、地表下約60cmで地山面が認められ、地山面は西方向、いわゆる溝に向かって徐々に落ち込んでいく。しかし、この落ち込みの上層は全て盛土で、竹林の造成の際の削平と思われる。



1. 表土
2. 黃褐色砂土
3. 淡黃褐色砂土



1. 表土
2. 暗灰褐色砂土
3. 黃褐色砂土(地山土)
4. 淡黃色砂
5. 暗黃褐色砂土
6. (黃)褐色砂
7. 灰黃褐色砂土
8. 灰褐色砂土



1. 表土
2. 灰黃色土
3. 灰黃褐色土(地山土)
4. 暗灰褐色土
5. (黃)褐色砂土(地山土)
6. 淡黃色土
7. 暗灰色土
8. 灰黃褐色土
9. (黃)褐色砂土
10. 灰黃褐色土



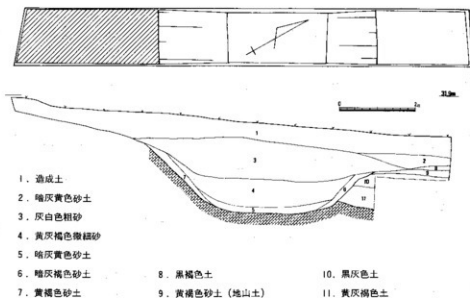
1. 表土
2. 黃灰褐色砂土
3. 灰白褐色砂

第7圖 T-4, 5, 6, 7平·断面圖(1/100)

T-8

このトレンチは、今回調査した内で最も明瞭に周溝が検出された。トレンチ南側では、表土直下に墳丘盛土が残存していた。周溝は、幅約600cm、深さ約150cmの規模で、周溝内には第3・4層と底部近くまで厚く砂層が堆積していた。この第3・4層中には、近世～近代にかけての磁器、瓦などを包含しており、古墳築造当時の周溝が百数十年前まで残存していたと考えられる。この様な状況は後述するT-9・11などで認められた。

ここでは、地山は北に向って傾斜しており、トレンチ北側では地山の上層に第8層～第11層の堆積が認められ、周溝も第8層から切り込まれている。第8層～第10層は、弥生時代中期の土器、サヌカイトなどを含む包含層である。その他の出土遺物としては第5層を中心に、須恵器（杯・甕）、円筒埴輪などが出土している。また、埴輪片の中には、須恵質のものが2片含まれていた。

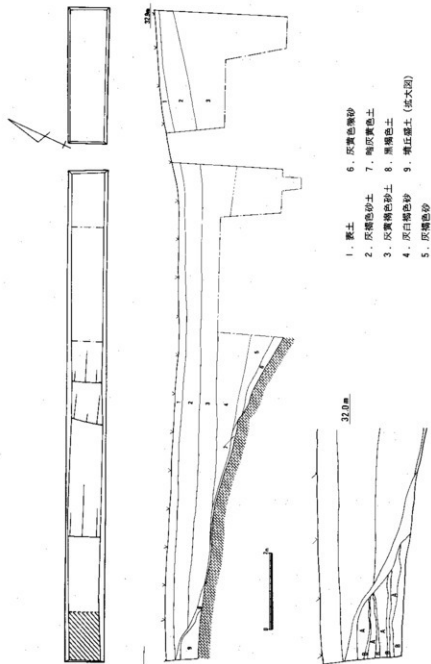


第8図 T-8平・断面図(1/100)

T-9

この地点は、前方後円墳説をとると、前方部にあたり、一段高くなる。トレンチは、竹林が密生しているため幅100cm、長さ1,700cmを設定した。その結果、墳丘寄りでは200cmにわたり墳丘盛土が残存していた。墳丘盛土は、第9図のように黒灰色土と黄灰褐色土が厚さ約5cmで互層に堆積しており、版築状に強く叩き締められていた。

地山面は、墳丘盛土からやや東方向に傾斜し、トレンチ中央部あたりで、さらに傾斜度を高めて下がっていく。この地山面の追求は、幅1mという狭さや上層堆積が砂ということもあっ



第9图 T-9平·断面图及砂断面放大图 (1/100 · 1/40)

途中で中止した。堆積状況を見てみると第1～3層が盛土で、第4、5層は、T-9の第3、4層と同質のものと察せられる。第6層は灰黄色微砂層で他の層に比べ遺物を多く包含していた。またトレンチ西側では、地表下約350cmまで掘り下げたが、第4、5層と類似した砂層が深く堆積していた。これらの状況からみて、第5、6層の堆積する地点は既に周溝内に当たると見ていいであろう。さらに、前方部と称される高さについては、聞き取り調査によると、丘陵東側に存在する池に堆積する砂が多量に丘陵上（前方部）に運び上げられ、更に造成、整地されている。また、随所にある崖面の調査、各地点のボーリング棒による調査でも砂の堆積しか認められなかった。

T-10

このトレンチは、T-9で周溝の外側肩部を抑えられなかったために補足的に設定したものである。地山面までは、地表下約70cmで、西側に落ち込んでいく周溝の肩部を確認した。周溝は、外方向には開かず墳丘に沿う様なラインを示した。遺物は、円筒埴輪片が少量出土した。

T-11

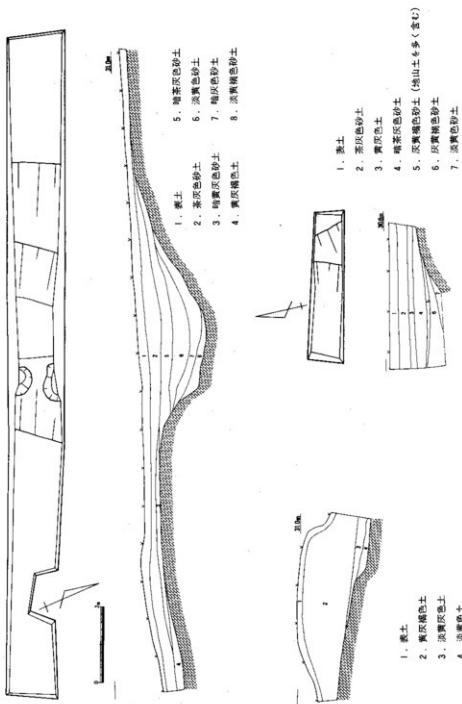
T-10のすぐ南側に、墳端部から長めのトレンチを設定した。トレンチ西側の墳丘際は、かなり掘削を受けており、表土下すぐに地山面が表われ、墳丘盛土は削平を受けていた。周溝は、幅500～600cm、深さ約120cmを測る。周溝内には、第5層～第8層がレンズ状に堆積し、特に第7層には多くの遺物を包含していた。また、第5・6層は、堆積状況から見てT-8と同様はかなり後世の地積と思われる。周溝外側傾斜面には、ビットが2ヶ所に検出された。いずれも径80～90cm、深さ15～20cmのもので並ぶ様に存在する。しかし調査区の関係上、規則的に続くものかどうか不明である。

周溝より外側は、地山が徐々に傾斜していくが、周溝肩部より300～400cmほど若干の高みを形成しており、T-3にみた施設のようなものが存在する可能性を残す。

出土遺物としては、円筒埴輪の他に須恵器の杯、甕の破片が出土している。

T-12

このトレンチは、T-10のやや東の高まりに設定した。第4図の古図の石室入口前部には『中武間位四十年前ハ溝、三間位堤』と記載されており、この土手状に残る高まりがその『堤』・外堤部状の施設の残存部である可能性を求めて調査したものである。しかし、その高まりの堆積状態は、大半が竹藪の盛土で外堤部的な施設を想起するものではなかった。しかし、第3、4層が堆積している段については、T-3・11に見た地山を削り出した外堤部状の遺構が存在した可能性をもたしている。さらに第3、4層は、堆積状況からみてさほど新しい堆積層ではないように思われる。



第10图 T-10, 11断面图 (1/100), T-12断面图 (1/100)

第3節 出土遺物

(1) 須恵器

今回の調査で出土した須恵器は、ほとんどのものがT-2の周溝内から検出されたものである。他のトレンチから少量ながら杯、甕の破片が出土している。第11, 12図に図示したものはすべてT-2から検出されたものである。図示した以外にも杯、高杯、壺などの少片がある。

杯蓋 (1~6)

いずれも少片であるため、分量は明確でない。1, 3~5は、天井部と口縁部をわける稜線が鈍くなっており、4は浅い凹線でわずかに判明する。口縁部は丸くおさめている。(1~5) 6の口縁端部には、まだ内傾する面を有し、稜をもつ。1の天井部内面には仕上げナデを施す。6は、陶邑編年(注1)によるTK10の特徴をもつ。1~5はTK43, 209に属するものか。

蓋 (7, 8)

口径が16.0cmと大きく、比較的器高が低くなり、高杯の蓋か。天井部中央には中凹みのつまみを有する。7は、8にくらべややつまみが大。口縁端部は丸くおさめる。7, 8とも天井部内面は仕上げナデを施す。外面天井部のヘラケズリは、稜線近くまであり比較的広い。色調は、淡灰色、暗灰色を呈し、0.2mm以下の砂粒を含み焼成は良好である。

杯身 (9~11, 13, 14)

いずれも口径は、13.5cm以上の大きいもので、破片であるため有蓋高杯になる可能性がある。たちあがりは内傾しており、さらに途中で上方に傾斜度をかえるものもある。(9, 10, 13)に縁端部は丸くおさめる。受部は、9の受口にくらべ、10, 11, 13はやや横方向に出る。14はたちあがり短く、内傾度も大きいことから、他にくらべてやや後出。9~11, 13は、陶邑TK10に近いものであろう。

有蓋高杯 (12, 15~18)

長脚2段で透しが上下2段に3方にあく。15は、16にくらべやや小型のものである。16は、杯部と脚部の対応が悪く、脚部は器壁が厚く大きい。脚部は筒部と裾部との境界には、2条(15)、3条(16)の凹線をめぐらす。裾部は大きく広がる。脚端部は、上下に肥厚するもの(16)と、横方向に拡張するもの(18)とがある。17は、杯部、脚部が重厚に作られている。たちあがりは、内傾し長くのびる。天井部は、広くヘラケズリのあとヨコナデを施す。12, 16も広くヘラケズリ。(12は、天井部に透しの切り込みが残る。)15~17の天井部内面は仕上げナデ。

脚部 (19~22)

高杯の脚部になるものか。裾部は大きく開き、端部は上下及び横方向に肥厚する。20は18に、22は15に類似する。19は裾部に凹線をもつ。

壺 (23, 24)

24は、23にくらべてやや大きく丸みを持ち、口頸部は細い。底部から孔までヘラケズリ。23は、焼成が良好で体部肩部に鈍い稜をもつ。

短頸壺 (24)

やや小型のものである。肩部に稜を持ち、体部下半はヘラケズリ。焼成は良好。

裝飾壺 (29)

口縁部は大きく開き、広口の口縁部になると思われる。肩部にはカキ目を施し、体部下半はヘラケズリ。肩部には2ヶ所に剝離痕があり、裝飾されていたものであろう。色調は灰色、胎土は2mm前後の砂粒を含み、26、27、34に類似する。

小型壺 (26~28)

おそらく裝飾壺に付属するものと思われる。26、28は29に色調、胎土とも同様なもので付着するものと考えられる。27は、焼成も良好で自然釉を帯びる。また、図示した以外に、生焼けの破片などが2~3片あり、裝飾壺は29以外に2個以上存在すると思われる。

壺 (30)

やや小型のもので、体部は丸みを持ち、口縁部はやや外傾しながらたちあがり、さらに外反する。体部肩部には、2条の凹線をもちその間にクシによる施文。体部下半はヘラケズリ。

壺 (31)

胴の張った体部を持ち、口頸部から外傾しながら立ち上がる。口縁部近くには、稜及び凹線を施す。体部上半には、叩きの後ヨコナデ、下半部はヘラケズリ。焼成はやや不良。

台付壺 (32, 33)

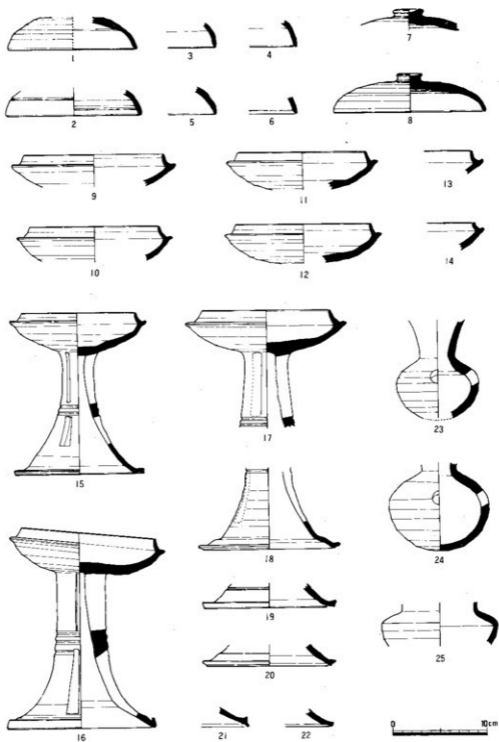
32は体部最大径が上方にあり、鈍い稜をもつ。口縁部は口頸部からゆっくり外反し、上方に延びる。口縁部、体部上半はヨコナデ、体部中央にカキ目痕が残る。体部下半のヘラケズリは、胴部中央近くまでと広い。脚部は、「ハ」の字に開き、端部で踏ん張り気味になる。3方に透し。23は、体部外面ヘラケズリ、内面は、指によるナデあげ、ヨコナデ。脚部の裾は大きく開き、端部を丸くおさめる。脚部には円孔を3方にあける。

器台 (34)

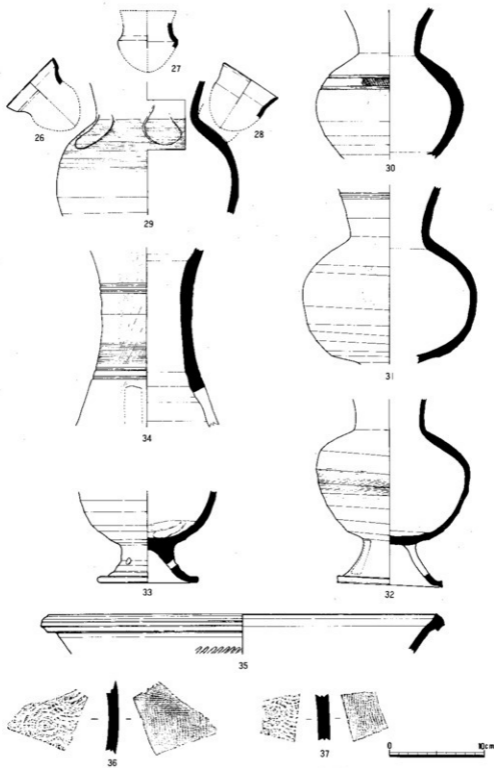
胎土、焼成からみて27の裝飾壺の脚部になる可能性が強い。脚部には、2ヶ所に2条の凹線を持ち、下方には透しがある。外面は、カキ目を施す同一工具で調整し、のちヨコナデ。更に部分的にカキ目を施す。内面はヨコナデ。

壺 (35~37)

口縁部は大きく外反し、口縁端部は折り曲げて、端部を上方につまり出す。頸部にはヘラ掃きの斜線を施す。



第11圖 T-2 出土須惠器實測圖(1) (1/4)



第12图 T-2出土须惠器实测图(2) (1/4)

(2) 埴輪

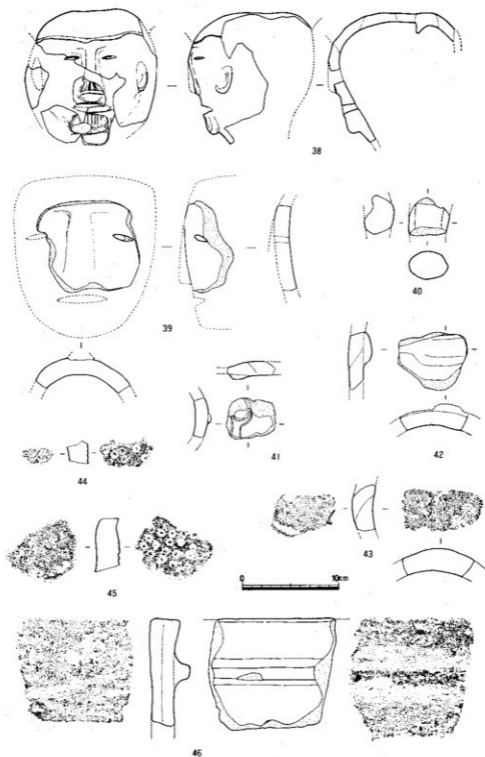
形象埴輪 (38~52)

形象埴輪は、いずれもT-2出土のもので、図示した以外にも多数形象埴輪の一部と思われるものがある。埴輪片は、全て保存状態があまり良好ではなく、形状が明らかなのは38、39の人物のみである。38の人物埴輪は、頭部全体の大きさに対して顔面の表現範囲が狭い。目と口は貫孔し、鼻はやや盛り上げられ、鼻穴をへらで切り込んで表現している。また、頭は丸く盛り上げ、へらで垂下する線を描き髭を表現している。頭髪部は、剥離面をもっており頭上には何か付いていたと思われる。頭部上半、顔面部は、ナデにより調整、頭部下半には刷毛目が残る。39は、38にくらべやや顔の表現が大きい。目は垂れ下がり、鋭く切り込まれ貫孔している。眉毛の段が一部残っている。

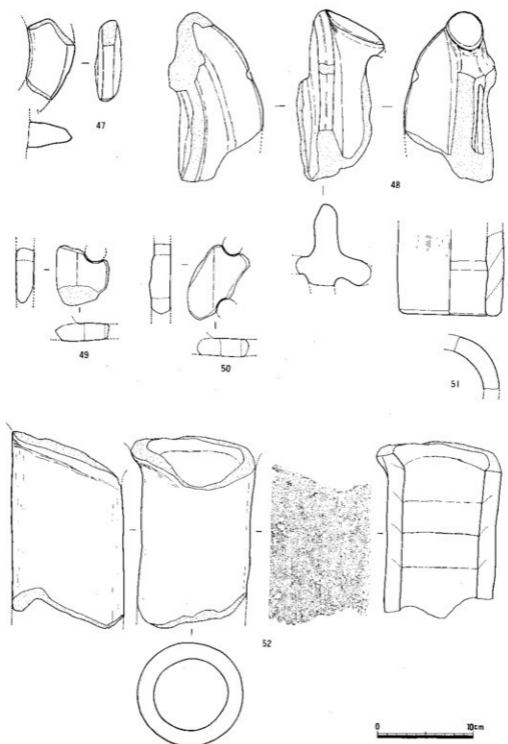
40は、柱状を呈しており手首に近い部分か。41、42は、彎曲する外面に突帯を張り付け文様帯を表現している。43は円筒形のものが外反する部位である。44、45は、器壁が厚く外面に竹管による施文を施している。45の上部は、竹管文が切れやや外反していく。46は、粘土板を2枚重ねた板状のもので、一方に肥厚した端面をもつ。また、端面近くの外面には突帯を張りつけている。家形埴輪に付属するものとも考えられるが明らかでない。48は、外方向に弧を描く高さ約5cm、厚さ約2.5cmの鈎状の突部をもつ。48には、その鈎状のものと交差するように延びる断面形を呈している。また、一方の端部には、傾斜する楕円形の突出部を有している。47は、48の鈎状の部位と同一であろう。形状については、馬の鞍を想起させる。49、50は、板状を呈し一方に剥離面をもち、その剥離線に沿うように弧状の透しを施している。51、52は、径11~12cmの円筒形を呈するもので、外面は縦方向の刷毛目、内面はナデを施す。52の上方は、やや傾斜する接合面をもち、人物の足部にあたるとも察せられる。また、接合部の下方は、腹部から接続し、接合部上方はさらに上方にのび、横腹から背に続く動物の足部であろうか。

円筒埴輪 (53~71)

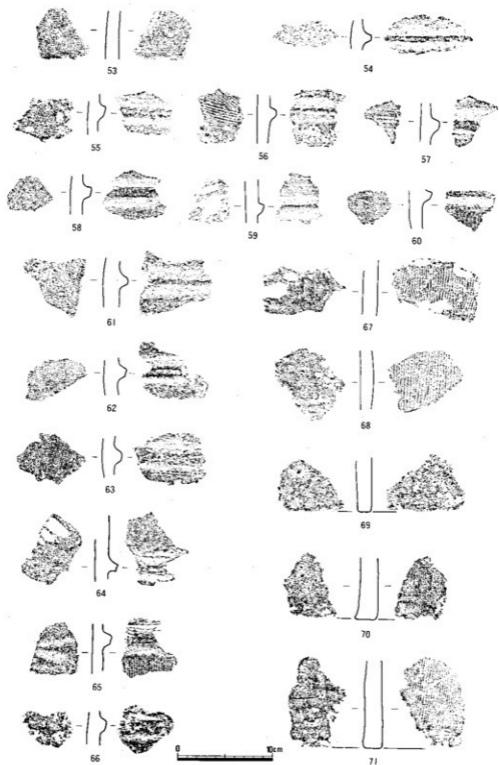
この円筒埴輪は、各トレンチより出土した。出土した埴輪は、いずれも小片であるため規模、形態についての詳細は明らかではない。しかし、出土した埴輪を総合的にみても、径はやや大きく、外面は縦方向の刷毛目を施し、内面はナデにより調整している。内面は、ほとんどのものがナデ調整であったが、少量ながら56、62の横方向の刷毛目痕を残すものも含まれていた。タガは、総体的に低いものが多かったが、54、60、64など細みでしっかりしたものも相当数認められた。口縁端部は、検出できなかったが、53のように縁部に近い部分では内外面に刷毛目を施すと思われる。基底部分(69~71)は、端部で肥厚し、底部外面は板状の土具により調整している。今回出土した埴輪は、ほとんどが埴質のもので、T-8から3片須恵質の埴輪が出土している。



第13图 T-2出土形象埴輪実測图(1) (1/4)



第14图 T-2 出土形象填绘实测图(2) (1/4)



第15図 各トレンチ出土円筒輪軸実測図 (1/4)

(3) 鉄 器

鉄鏃 (1~35)

T-2の周溝内底部より一塊になって出土したものである。これらはもともと石室内に埋納されていたものと考えられ、幾度びかの追葬がなされた際に取り片付けられ、石室前面の周溝に放置されたものであろうか。

鉄鏃は、破片としては35片を数えられるが、破損品も多数含まれているところから、ここでは30~35本としておく。鉄鏃は、すべて有径式で、鏃身部が続く鏃被部は長く「棘」を有する。「棘籠被ぎ柳葉式」(註-2)に含まれるものである。これらのものは、18、35を除くと、計測値に若干の差はあるもののほぼ均等で規格品と呼べるものである。その平均計測値では、全長約160mm、鏃身長約19mm、鏃被長約97mm、茎長約44mmを測る。18は他に比べやや小形で全長約137mm、35は大きく全長約206mmのものである。鏃身部には、鏃被部からほぼ直角に張り出した小さな「鬚」をもつもの(3、13、14、16、18)と柳葉状のものがある。横断形を見ても鏃身部は凸状のものとレンズ状のものに分かれる。また、鏃被部は長方形を呈し、基部はやや丸味を持つものと、方形のものがある。基部には、木目が縦位に付着残存しているものも多く認められた。30には、「棘」のすぐ下方に横方向の木目も認められた。

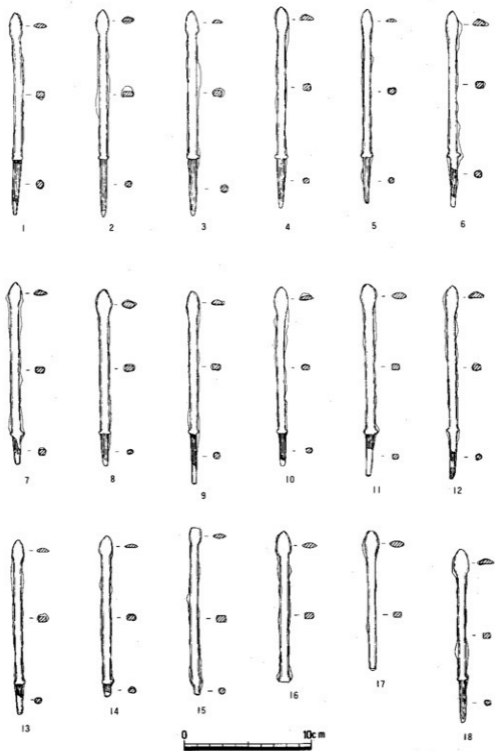
鉄釘(1~7)

T-2の周溝内底部より完形のものも含めて7本出土した。鉄釘はいずれも横断面が正方形ないし長方形を呈しており、頭部は折り返して傘状に拡張している。長さは、完形品の36、39で7~8cmを測る。この鉄釘の中には、36、37のやや大きいものと、40、41のやや小形のものがある。また、これらの鉄釘には木質残痕は残っていないが、おそらく石室内に納められていた木棺に使用されていたと考えられる。

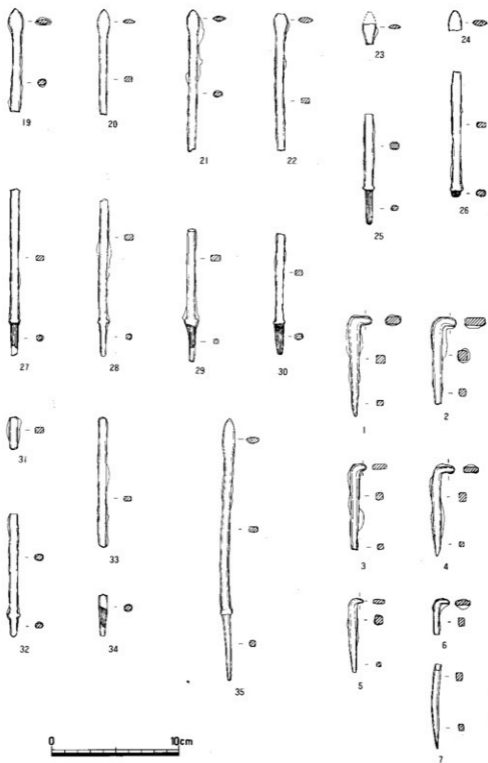
- 註1 田辺昭三『陶邑古
窯址群Ⅰ』
平安学園考古学ク
ラブ、1966
- 註2 後藤守一『上古時
代鉄鏃の年代研究』
『日本古代文化研
究』1942

番号	重量 g	長さ mm	身 巾 mm	頭 巾 mm
1	13.9	79.5	7.0×7.0	12.0×6.0
2	15.7	(69.0)	8.0×8.0	16.5×6.0
3	8.8	(67.0)	6.0×6.0	11.0×5.0
4	12.1	70.5	6.0×7.5	12.0×4.0
5	6.1	(58.5)	6.0×7.0	9.0×4.0
6	5.1	(28.0)	5.0×7.0	12.0×4.0
7	5.1	(66.5)	5.0×7.0	

表1 鉄釘計測値表 ()内数字は現存計測値



第16图 T-2 出土铁器实测图(1) (1/4)



第17图 T-2出土铁器实测图(2) (1/4)

番号	重さ g	全長 mm	鐵身部			篋被部		茎部	
			長さ mm	巾 mm	厚さ mm	長さ mm	巾 mm	長さ mm	巾 mm
1	15.4	159.0	20.0	10.0	4.0	96.0	6.5×4.5	43.0	5.0×5.0
2	15.8	162.0	18.0	10.0	3.0	99.0	8.0×4.0	45.0	5.0×4.0
3	20.1	162.0	18.0	8.0	3.0	98.0	7.0×5.0	46.0	5.5×4.5
4	16.9	157.0	19.0	10.0	4.0	100.0	6.0×5.0	38.0	4.5×3.5
5	13.1	152.0	18.0	8.0	2.5	98.0	5.5×4.0	36.0	4.0×4.0
6	32.8	154.0	23.0	9.0	5.0	92.0	5.5×5.0	39.0	5.0×4.5
7	18.5	142.5	18.0	9.0	3.0	102.0	7.0×5.0	22.5	5.0×4.0
8	15.5	138.0	22.0	10.0	5.0	91.0	7.0×4.5	25.0	5.0×2.5
9		151.0	20.0	10.0	3.0	91.0	6.0×5.0	40.0	5.0×4.5
10		140.5	18.5	11.0	3.0	96.0	6.0×4.0	26.0	5.0×4.0
11	31.8	150.5	27.5	12.0	5.0	100.0	6.0×4.5	33.0	5.0×4.0
12	16.6	151.0	21.0	11.0	4.0	94.0	5.5×4.0	36.0	4.0×3.5
13	14.1	136.0	17.0	9.0	3.0	96.0	6.0×5.0	(23.0)	4.5×3.5
14	13.4	126.5	14.5	10.5	2.5	102.0	6.0×4.0	(10.0)	5.5×3.5
15	15.0	132.0	(14.0)	10.0	3.0	(109.0)	6.5×5.0	(9.0)	5.0×4.5
16	12.3	119.5	19.0	11.0	4.0	100.5	7.5×5.0		
17	11.2	110.0	18.0	11.5	5.0	(92.0)	6.0×4.0		
18	13.0	137.0	19.0	11.5	4.0	84.0	6.0×4.0	34.0	5.0×3.0
19	9.9	81.0	18.0	11.0	4.0	(63.0)	6.0×4.0		
20	6.8	83.0	19.0	9.5	3.0	(64.0)	6.0×4.0		
21	11.3	112.0	18.0	9.0	3.0	(94.0)	6.0×4.0		
22	11.8	108.0	(16.0)	11.0	5.0	(92.0)	7.0×4.0		
23	1.9	16.5	(16.5)	10.0	3.0				
24	1.3	16.0	(16.0)	11.0	4.0				
25	8.0	86.5				(59.0)	7.0×4.5	(27.5)	5.0×4.0
26	10.2	99.0				(94.0)	7.0×4.0	(5.0)	6.0×4.0
27	12.2	130.5	(4.0)			100.5	6.0×4.0	(26.0)	5.0×4.0
28	12.8	123.0				(98.0)	7.0×5.0	25.0	4.0×4.0
29	10.3	104.5				(74.0)	7.0×4.5	(30.0)	6.0×3.5
30		94.5				(71.5)	6.0×4.5	23.0	5.0×4.0
31	2.9	27.0				(27.0)	7.0×4.5		
32	10.1	97.0				(81.0)	6.0×4.5	16.0	5.0×4.0
33	17.7	102.5				(102.5)	6.0×4.0		
34	2.3	34.0						(34.0)	5.5×5.0
35	19.6	206.0	27.0	10.0	5.0	127.0	7.0×4.0	52.0	4.5×5.0

()内数字は現存部計測値

表2 T-2出土 鉄鏡計測値

第4章 ま と め

原地形（第3図参照）

古墳の北西、石鍾宮の存する丘陵頂部から、東南方向に一支脈が急傾斜をもって延びる。その支脈は、下方近くで傾斜度を緩め、やや北に稜線をふり、丘陵先端部に至る。丘陵先端部は、あたかも台地状に前方に広がる平地に突き出る。本墳は、丘陵先端部にその一角を占める。

墳丘と竹藪の間に生じている崖面を観察してみると、墳丘南東～西にかけては表土近くまで地山を認めることができる。墳丘南東のT-11周辺の墳丘崖面では、地山が竹藪地表面よりやや上の推定海拔約31.0mにまで下がっていることがわかる。古墳の北西から南東を結ぶ線は、古墳背後から延びる支脈の稜線上に当たり、その地山面の高度差は推定で約2～2.5mに達すると思われる。T-11の地山面の状況から、地山はさらに南東に向けて徐々に下がっていく。古墳の北側には、小さな谷が入り込み、古墳西側にも谷部が認められ、その間に形成された幅約50～60m前後の丘陵が南東方向に平地に向って延びていたと考えられる。

さて、ここで問題となるのは、古墳の東側の高まり、いわゆる「前方部」に当たる部分まで、その丘陵が延びていたかである。この古墳東側の高所は、調査中の聞きとりによると、東側の低い地点にある地に相当量の砂が堆積し、度々その砂を東側高所に運び上げたと言う。今回の調査でもT-9トレンチ東側では、地表下3m以上の砂の厚い堆積片が存在し、さらに、ボーリング棒による調査でも地山面が高位に存在するという事実がつかめなかった。しかし、たとえ丘陵が東側高位部にまで延びていたとしても、本墳の占地する地点が古墳造営にあたって、最も好位置であるということには変りはない。

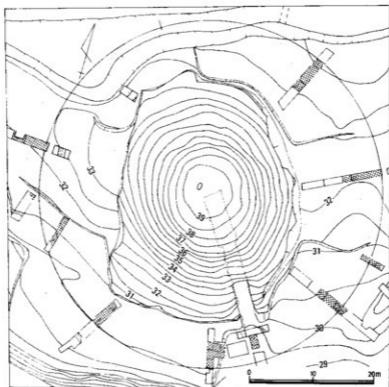
古墳の規模、形態

今回の調査では、大部分のトレンチで周溝が検出された。周溝が検出された地点では、いずれも竹藪の造成盛土の際に堀削、削平をかなり深くまで受けており、周溝の肩部は多少移動すると思われる。検出した周溝を延長し、復元してみると、ほぼ墳丘を中心として円弧線上に存在することが明らかである。T-9では、墳丘の傾斜面の延長上に地山面が下がっていき、途中やや傾度を変え、さらに下方に落ち込む。T-9内では、それに対する外側の上がりは検出できなかったものの、墳丘盛土の残存位置、堆積状況さらに地山面の検出状況からみて、墳丘裾部と認めるに足る条件は整っていると考えられる。また、T-9の地点は、前方後円墳説をとると、後円部と前方部の接点に位置しており、先学の研究に従えば、その地点には、地山の整形面や盛土が存在しなくてはならない。たとえ、後世の堀削、削平を受けたとしても、地表

下3 mまで及ぶとは到底考えられない。さらに、墳丘頂部との比高差からもそれが言えるであろう。

また、墳丘の西側の竹藪中には、墳丘から続く高位部が西方に延びる。この高位部を張り出しと考え、帆立貝式の墳形をもつとの意見もある。事実、今回の調査では、T-6の周溝は他に比べてやや外側に位置して検出され、調査中においてもその可能性を考えたものである。

T-6を中心とする墳丘東南部は、原地形を考えた場合丘陵部上位に位置しており、墳丘の築造段階においてはその丘陵を切断し、墳形を整え周溝が形成されたと考えられる。この丘陵部切断地点に周溝を巡らす場合、堀削規模は他に比べて大規模になり、周溝幅もまた結果として幅広く形成される。T-6周溝の場合においても、上記の条件を適応できるとすれば、本墳は丘陵線上の南東～北西にやや長い円墳を呈すると考えられる。しかし、今回調査したトレンチの量、設定位置が限定されたという状況もあり、T-6の周溝については問題を残す結果となった。図上で復元作業を行うと、右室奥壁の中央を支点として約27mの円を描く(第18図)と、T-6を除く検出した周溝の外側線に乗り、T-6の周溝は、約5m外面に位置する。



第18図 墳丘測量図(1/600)

また、同じ様に約24mの円を描くと、周溝の底部にあたる。これらのことから、本墳が正円形を基本とした築造であると仮定すれば、古墳東南においては、約5m以内の張り出しが存在する可能性が考えられる。このことから、本墳は直径約50mの円墳に東南部に幅約15m以内、長さ約5m以内の張り出しをもつ古墳とみなすことができる。このような張り出しをもつ円墳は全国的にみても大形の古墳によく認められるものである。吉備地方においてもこのような円墳は、橋原町月の輪古墳（註1）、山陽町森山古墳、津山市中宮第一古墳（註2）など数多く認められる。上記のことから、本墳は、張り出しを持つ円墳と考えるのが妥当であろう。

古墳築造の時期について

箭田大塚古墳からは、明治34年の発掘の際に須恵器、土師器、太刀柄頭、刀身装身、鉄鍔、馬具類、金環、玉類など数多くの遺物が明らかになっている。これらの遺物は、いずれも6世紀後半の時期とされているものである。また、石室の構造などからも、本墳の時期は備中こもり塚古墳よりやや後出のものであるとされており、6世紀後半の時期を与えられてきた。

今回の調査では、T-2周溝内より多量の出土遺物があった。これらの中でも年代を示す尺度としての須恵器も多く含まれており、それらの須恵器の中には、陶邑編年（註3）によるTK-10のものが認められ、明らかに吉備寺藏の須恵器より古相の特徴を示している。いままでに出土していた須恵器及び今回の調査でも確認できた須恵器はいずれもTK-43、TK-209の特徴を有するものであった。古相の須恵器は、時間的には6世紀中葉に比定できよう。今回の調査、及び吉備寺藏の遺物によるかぎり、6世紀中葉に埋葬が行われ、少なくとも6世紀後半、7世紀近くまで追葬が行なわれたことを想定できよう。

注1 近藤義郎他「月の輪古墳」1960

註2 近藤義郎「佐良山古墳群の研究」1952

註3 田辺昭三「陶邑古窯址群」I 1966



箭田大塚古墳周辺 (1/12,500)

図版 2



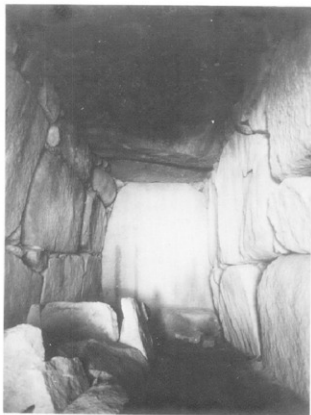
2-1 箭田大塚（上空から）



2-2 箭田大塚全景（南から）



3-1 墳丘及び石室入口（南から）



3-2 石室内部（南から）

図版 4



4-1
T-1 周溝検査状況
(北東から)



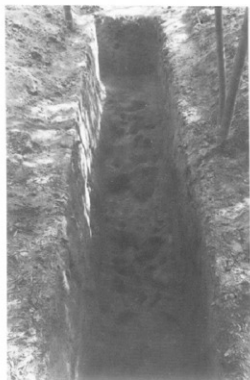
4-2
T-2 周溝堆積状況
(北東から)



4-3
T-2 遺物出土状況
(西から)



5-1 T-3 周溝検出状況 (北東から)

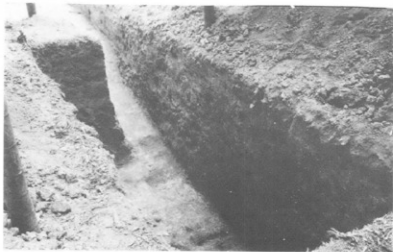


5-2 T-4 周溝検出状況 (北から)

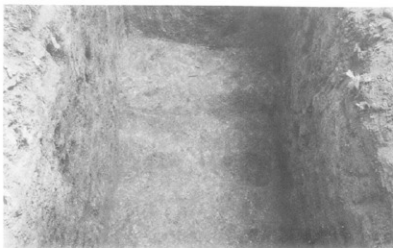


5-3
T-5 周溝検出状況
(南から)

図版 6



6-1
T-6 周溝堆積状況
(北東から)



6-2
T-6 溝検出状況
(西から)



6-3
T-7 検出状況
(北から)



7-1
T-11周溝検出状況
(北東から)



7-2 周溝堆積状況(東から)

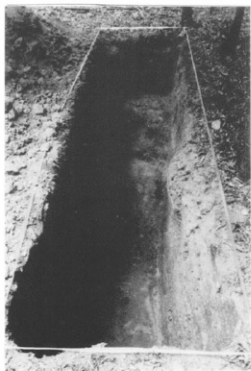
図版 8



8-1
T-9 墳丘及び周溝検出状況
(北東から)



8-2 T-9 墳丘盛土堆積状況
(南東から)



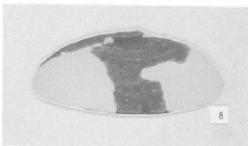
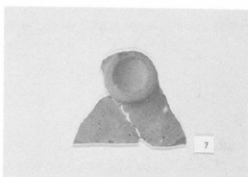
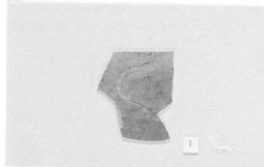
8-3
T-10周溝検出状況
(西から)



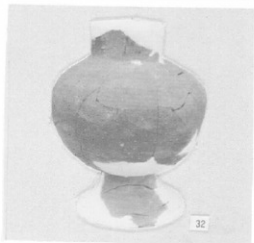
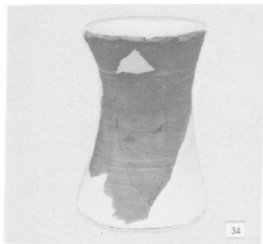
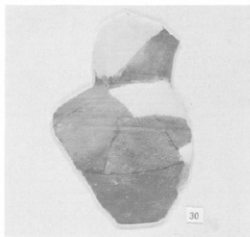
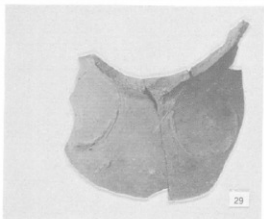
9-1 周溝検出状況（南東から）



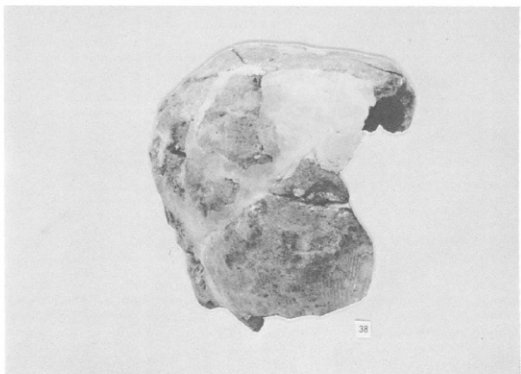
9-2 周溝検出状況（東から）



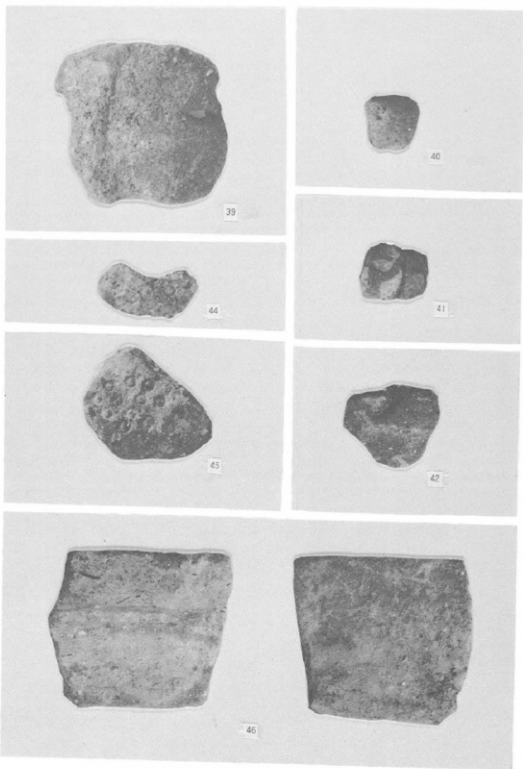
T-2 出土須惠器(1)



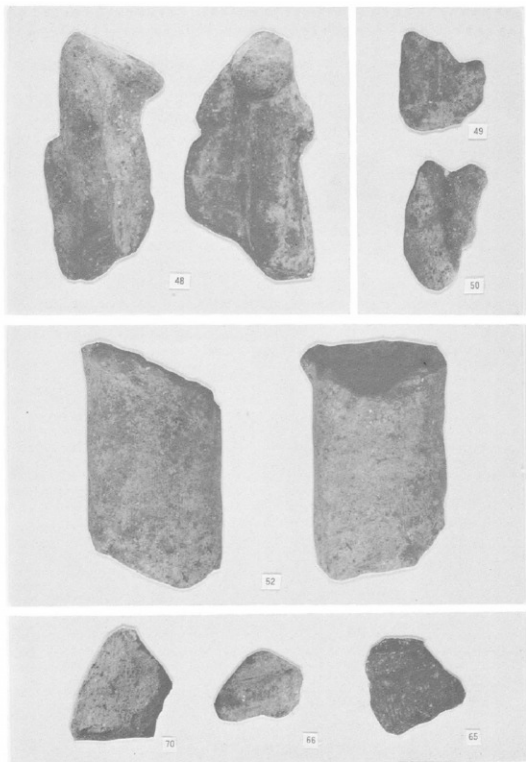
T-2 出土須恵器(2)



T-2 出土人物埴輪

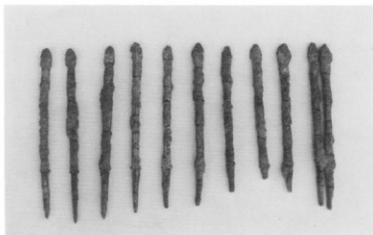


T-2 出土形象埴輪(1)

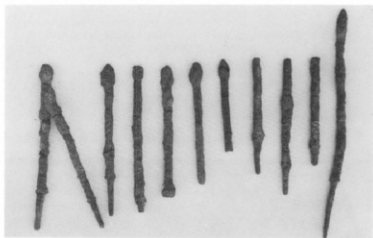


T-2 出土形象埴輪(2)

15-1 T-2 出土铁錐



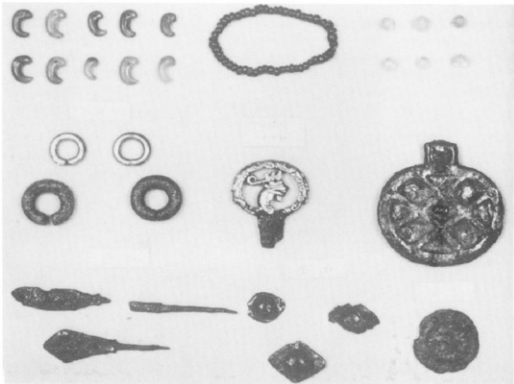
15-2 T-2 出土铁錐



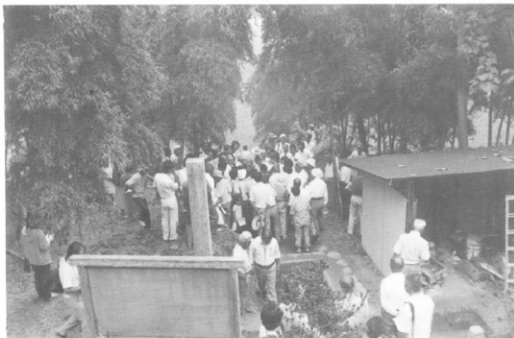
15-3 T-2 出土铁釘



T-2 出土铁器



16-1 吉備寺藏 新田大家古墳出土遺物一部



16-2 現地説明会

や た
箭田大塚古墳

1984. 3

編集・発行：真備町教育委員会

印刷・製本：ふじや高速印刷

